

博物館展示における「ことば」の役割

～利用者による展示理解をすすめるには～

神奈川県立生命の星・地球博物館 企画普及課長 広谷 浩子

主任学芸員 加藤 ゆき

1. はじめに

展示は博物館の表看板であり、各館の主張点を最も端的に表わしたものでなければならない。たとえば、発表者らの所属する神奈川県立生命の星・地球博物館（以下、地球博物館とする）では、館名が示す通り、地球の誕生と生命の歴史に関する展示が大きく展開されている。

展示にはまた、展示企画者と来館者の間のコミュニケーションという視点もある。展示においては、様々な展示資料やグラフィックス、演示具、音声、パネルなどによって展示の意図が来館者へと伝えられる。企画者は来館者が展示内容を理解してくれることを求めているのだが、いったん展示が完成した後には、企画の意図が伝わったのか否かについて詳しいモニターがなされることは非常に少ない。展示の「効果」は来館者の数によってだけ評価されることになり、企画者にとっても来館者にとっても中途半端な状況になる。

発表者らは、来館者にとってわかりやすい展示をめざす立場から、2種類の調査をおこなってきた。第1は、展示の成り立ちの把握である。展示に使われる「ことば」が扱う情報の質や量を調べ、展示の構成のパターン化を試みた。このパターン化に基づき、さまざまな博物館施設の展示についても「ことば」の質や量を精査した（表1）。この結果、いくつかの有効な視点を得ることができた。

第2は、来館者による展示観覧行動の観察分析である。地球博物館の展示コーナーで滞留時間、注視行動、展示をみながらの会話などの記録をするとともに、展示内容に関する理解度テストも実施した。調査期間の最後には展示更新を行い、その前後で観覧行動に変化があるかについても調査した。

博物館名	種別	調査年月
シルク博物館	単一テーマ	2013年12月・ 2014年1月
湘南台子どもセンター	単一テーマ	2013年7月、8月
東北大学理学部自然史標本館	自然	2014年5月
横浜市立歴史博物館	人文	2015年1月
国立科学博物館	自然	2015年1月・12月、 2016年12月
川崎市市民ミュージアム	美術	2015年1月・12月、 2016年12月
世田谷区立文学館	人文	2015年6月
横須賀美術館	美術	2016年7月
神奈川県立近代文学館	人文	2016年6月
ふじのくに 地球環境史ミュージアム	自然	2016年11月
横須賀市自然史博物館	総合	2016年11月
北海道立北海道博物館	総合	2016年11月
白老町立アイヌ民族博物館	人文	2016年11月
旭川市立旭山動物園	動物園水族館	2016年11月
札幌市立円山動物園	動物園水族館	2016年11月
鳥羽水族館	動物園水族館	2016年12月
名古屋市立東山動物園	動物園水族館	2016年12月
印刷博物館	単一テーマ	2016年12月
三重県立総合博物館	総合	2016年12月
四日市公害と環境未来館	単一テーマ	2016年12月
南山大学人類学博物館	単一テーマ	2016年12月
国立九州博物館	人文	2017年1月
福岡市博物館	総合	2017年1月
北九州市立いのちのたび博物館	総合	2017年1月

表1 展示における「ことば」役割に関して調査を行なった主な博物館。

2. 展示の成り立ちの把握

1) 展示用テキストの質と量の検討

展示室での文字情報は、標本ラベルや解説パネル、動画のテロップなど、様々な箇所で見られる。自然史博物館を例にとれば、標本の種名や学名、採集データ等が書かれた標本ラベル、その標本の由来等を紹介する解説板、複数の標本が集まることにより構成される小テーマ展示の解説板、それらの展示の集合体である中・大テーマ展示の解説板などがあげられる。地球博物館の常設展示室は、地球展示室、生命展示室、神奈川展示室、共生展示室の4つに分かれ、それぞれが大テーマを持つ。たとえば、生命展示室の大テーマは、「生命を考える・地球生命の営み」であり、その下に「魚類の世界」や「鳥類の世界」、「恐竜から哺乳類へ」といった中テーマがあり、それぞれはさらに数個の小テーマを扱っているという形である（図2）。

発表者らが調査を行なった博物館施設の多くは、ほぼ同じような構成で展示が成り立っており、今回の展示評価はこの展示の成り立ちを基本として、各展示の解説板の設置点数、解説文字数、図版の有無、および標本ラベルの内容について調査を行った。

地球博物館のほか、シルク博物館、ふじのくに地球環境史ミュージアム、北海道博物館の4施設についてまとめると、表2のようになる。

展示AからDまでの各展示をみると、展示を構成するテーマ数、ことばの量や内容は大きく異なる。解説板や図版の数を少なく抑えたCのような展示もあれば、解説、図版をふんだんに使って説明を展開するBのような展示もある。

その構成を詳しく見ると、家族連れでにぎわう展示Cでは、文字による解説を極力排し、形の機能美に注目してもらうデザイン重視の展示となっている。これに対して、養蚕産業についての学習館として連日多くの小学生が訪れる展示Bでは、標本だけでなく、解説やグラフィックスによっても詳しい情報を得て、理解してもらうような学習重視の展示をめざしている。

それぞれの博物館がどのような来館者をターゲットにしているのか、展示を通して何を訴えたいのかによって、ことばの情報の量や質に違いを持たせることは、展示の作製段階で意図すべき項目であり、情報伝達の手法として効果的だと考える。



図1 家族みんなで展示観覧。
お母さんも子どもと一緒に
しゃがんで見ている

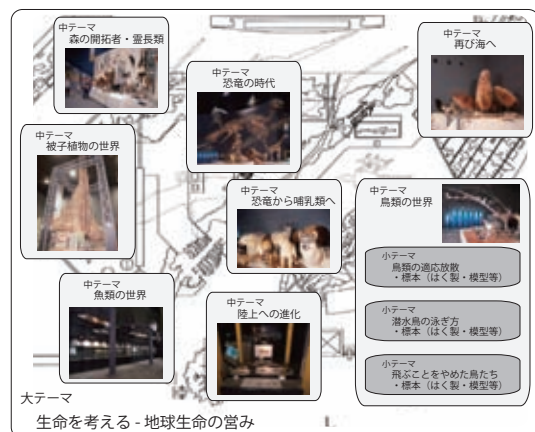


図2 地球博物館生命展示の成り立ち

展示	施設名	開館年	調査対象とした展示		解説板数	文字数※	図版点数	標本の有無	標本ラベルの情報
A	神奈川県立 生命の星・ 地球博物館	1995	生命を考える ー地球生命の営み	大テーマ	1	253	1	あり	和名・学名・生息地
			恐竜から哺乳類へ (哺乳類の分類展示)	中テーマ	1	153	1		
				小テーマ	17	140～190	各0～1		
B	シルク博物館	2009	ふしぎファーム	大テーマ	0	0	0	あり	タイトルと短文解説 (英文併記)
			蚕を育てよう	中テーマ	1	626	1		
			(養蚕のながれ)	小テーマ	6	30～100	各1		
C	ふじのくに 地球環境史 ミュージアム	2016	展示室7「ふじのくにの 生物多様性」	大テーマ	1	203	0	あり	和名・学名
			ー	中テーマ	0	0	0		
			ー	小テーマ	0	0	0		
D	北海道博物館	2015	北海道博物館 「人類の時代へ」	大テーマ	1	216	5	あり	タイトル、産地 (英文併記)
			「大地のなりたち」	中テーマ	3	200～220	各5		
			ー	小テーマ	0	0	0		

表2 各館展示コーナーの「ことば」に関する情報

2) ことばの論理と配列ルール

展示のわかりやすさは、「ことば」の配列や見せ方とも深くかかわる。図3にシルク博物館の「ふしぎファーム」に設置された展示パネルの配列を示した。展示項目は、大テーマ、中テーマ、小テーマと階層構造となっているのだが、色の違いやバックのグラフィックスなどでまとめあげられている。この展示は、発表者らの調査時の約3年前にリニューアルオープンしたもので、グラフィックスや写真、英文説明がすべて1つのパネルの中に盛り込まれた美しいパネルであった。

図4の三重県立総合博物館も同様に、写真、動画、グラフィックス、多言語の解説文が一体化した複合型の解説パネルである。近年オープンした北海道博物館の展示でも完成度の高いパネルを見ることができる。このようなパネルでは、中に入れる要素のカテゴリーやそれらの情報量や質もそれぞれの配置も厳選され整理されている。盛り込まれる情報のタイプやパターンをあらかじめ理解すれば、読みやすく、理解も進むものとなる。パネルに示された情報は多様で、来館者は、自分の興味関心に応じて、パネルに盛り込まれた情報を取捨選択して知識を深めていくこともできる。



図3 パネルは論理構造を反映してグループ化され、グラフィックスの中に配置されている（シルク博物館）



図4 三重県立総合博物館の複合型パネル。動画、展示標本、グラフィックスなどの要素が用意され、その中に解説文も組み込まれる

しかし、反面、展示企画者による展示更新は難しく、部分的な修正もデザインを優先させるのであれば簡単にはできない。そのため、情報発信が遅れるという決定的な欠点も無視できない。まとまった予算のもとに整備された解説パネルも時間が経過すれば、更新すべき時を迎えるはずであり、長期的視点での「ことば」の管理についても考えなければならない。

3. 展示観覧行動の観察

ここまで、展示を企画する立ち場から、「ことば」の役割を検討してきたが、展示室の各コーナーでは、実際に解説パネルやさまざまなグラフィックスがどの程度読み取られているのだろうか。

来館者の行動観察やその他の来館者の展示観覧行動を観察したり、その結果についてインタビューしたりする「モニタリング」調査の結果を紹介したい。

1) 地球博物館における常設展示の観覧行動観察

発表者は、以前にも、地球博物館の常設展示室内で、来館者の展示観覧行動を観察し、展示室内の目玉となる展示物が来館者の関心を集め、呼び合ったり、会話がもりあがったりする場面があること、このような楽しい「博物館体験」が、次の段階の博物館訪問にもつながることを論じた（広谷，2005）。

今回は、展示内容の理解という観点から、展示コーナーを限定しての観察を行った。地球博物館の3階に位置する「ジャンボブック展示」は、本を開いた形をした展示ケースが特徴的なスポット展示コーナーである。



図5 展示更新前のジャンボブック展示
「私たちはアフリカで生まれた」

ここで発表者らは、人類進化理論を紹介している「私たちはアフリカで生まれた」を展開中である。2000年代になって人類化石が数多く発見され、人類進化の理論は大きく変わってきているにもかかわらず、学校の理科教育の中で紹介されることがほとんどないため、来館者にとっては、目新しい情報になっていると考える。

この展示を使い、来館者の興味関心をひくための試みや展示全体の構成の検討などを試験的行い、来館者の観覧行動をモニターしながら展示更新を進めてきた。詳しい調査結果については、現在分析中であるが、観覧行動の概略は以下の通りである。

- 使用した展示ケースは、ジャンボブック展示室の東端に位置し、来館者の動線上では、出口に最も近い。そのため、ケースに目をむけずに素通りする例が多かった。

- 見開きページの左側は、化石人類の頭骨が並べられて遠くから見ても目立つので、「がい骨がたくさんある」と、子どもたちが必ず近くまでやってくる。一方、右側のページは、残念ながら注目度が低かった。
- 全体として、ケースを観覧する時間は、長くて2分程度というものだった。
- 親から子への解説の場面が一貫して多くみとめられた。子どもにパネルを読んで聞かせたり、指さしをして注目を促したり、子どもの視線と同じ高さまでしゃがんで観覧したりする行動が目立っていた。

2) 来館者の観覧傾向を知るための様々な試み

来館者の展示内容に対する興味や展示手法の嗜好性を探るため、展示の理解度テストや展示手法の選好性アンケートなどを実施した。

テーマはすべて人類進化に関するもので、上記のジャンボブック展示室のほか、2か所の展示で行った。新しい知見を解説パネルの中に入れ、展示観覧後にそれらの内容についてクイズ形式のワークシートを使って対面式で尋ねる、という形で実施した。

クイズの存在をあらかじめ知らせることなく、抜き打ちで行なったときの正答率は、20%前後であったが、クイズがあることをあらかじめ知らせた場合の正答率は80%前後にもなった。展示内容を理解しながら読み進めるには、何らかの動機づけが必要であり、新奇な情報を解説板に書かれた文字情報だけで伝えることは不十分であることが、この調査により明らかとなった。

来館者に伝えたいこと、これだけは主張したい・・・としながら、展示の効果、理解度について、モニターしていないことは、不十分だと深く反省する結果となった。

4. 展示のあるべき姿とは？

発表者らは、各地の博物館施設の展示を数多く調査して、さまざまな形の情報提供を確認してきた。日本語、英語以外にもハングル、中国語、ロシア語でもまとめられたより詳しい解説シート、個々の展示と連動させた音声解説ソフト、展示デザインはすっきりまとめているがより詳しい情報にも簡単にアクセスできるようなくみ、調べ学習用の記録テーブルなど、来館者の知的好奇心の多様性にきめ細かく対応できるような工夫があった。それら「痒い所に手が届くように」工夫がほどこされた展示は、レベルが高いものであると考える。

ただし、展示を構築するにあたり、展示内容の立案者は博物館スタッフであるが、実際に展示のための解説板やグラフィック等の造作製作及び設置は業者に委託する施設が多いのが現状である。そのため、当初に作られた展示の造作等が複雑であればあるほど、限りある予算の中での内容修正がむずかしくなることも事実である。新しい知見を常に展示に反映させる、ということを考慮すると、パネル全体のデザインが完成された複合型パネルや、美しいグラフィッ

クの入った解説板が万能ともいえない。

そこで、博物館が主体的に展示をつくり維持していくためには、どうすべきか、これまでの調査をもとに考察を試みた。

まずは、博物館展示の企画・公開・維持にあたり、モニター制度の導入に真剣に取り組むべきである。展示のターゲットを定め、モニターを募集し、いくつかの段階で展示をチェックし、結果を反映させる。このような流れを作ること为目标に、来館者の観覧行動や動向をより詳しく調査するべきである。

次いで、展示室の解説板の情報提供のあり方をもっと工夫すべきである。文字情報をながめるだけでは、情報が伝わらないことが明らかになり、来館者の理解しようとする動機づけを強める必要があるとわかった。この部分の工夫は、各館の状況をいつも把握している現場スタッフだからこそできるものとする。

本研究は JSPS 科研費 JP25350410 の助成を受けたものです。